

ヘブル人への手紙13章11－13章「宿営の外へ」

1A 宿営の外で焼かれるからだ 11

1B 罪を清める血

2B 宿営から離れる罪

2A 門の外の苦しみ 12

1B ご自分の血による清め

2B 城壁の外での十字架刑

3A 神の恵みへの応答 13

1B イエスの辱め

2B 共同体の外

3B 神の近づき

本文

ヘブル人への手紙13章を開いてください。ついに、ヘブル書の最後の章まで来ました。著者は、ユダヤ人の信者たちに、イエスへの信仰をしっかりと忍耐を働かせて堅持していなさいと励ましています。そして、ここ最後の章でも、その励ましをします。それは、「宿営の外に出て、みもとに行こうではないか」ということです。11 節から 13 節を読みます。「¹¹ 動物の血は、罪のきよめのささげ物として、大祭司によって聖所の中に持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるのです。¹² それでイエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。¹³ ですから私たちは、イエスの辱めを身に負い、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。」宿営とは、イスラエル人たちの宿営です。ユダヤ人の信者たちに、イスラエル人の宿営、つまり、ユダヤ人の共同体から追い出されたとしても、勇気を出して、主のみもとに行こうではないか？ということなのです。

私が、30 年以上の信仰生活の中で、だんだんわかってきたことがあります。それは、日本人など、アジアの人たちにとって、聖書の中にいる人々は、意外に身近な存在なのだという事です。聖書を読み、親しんできて、だんだん気づいてきたことですが、大きなきっかけは、トルコとギリシアへ、使徒たちの足跡を追う旅に出かけた時です。団長はアメリカ人の牧者なのですが、日本人である私たちを使って、自分の聖書メッセージを語っていました。聖書の世界がいかに、アメリカ人に代表されるような個人主義的なものではなく、人と人のつながりや結びつきを大事にする文化の中にあったか、ということなのです。

「マタ 10:37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」と、主イエスは言われました。

た。かなり、厳しい言葉です。さらに、「ルカ 14:26 わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、さらに自分のいのちまでも憎まないなら、わたしの弟子になることはできません。」とも言われました。憎む、という言葉まで、主は使われています。アメリカであれば、イエスを自分の主として信じるか信じないかは、個人の生活で罪を犯しているのを捨てて、イエスに自分をすべて明け渡すかどうか？になります。そして、自分が確かに、天国に行けるのかどうか？が関心事です。しかし、日本では違います。自分自身が天国に行けるのかどうか？ではなく、「家族をどうするのか？」ということが、最大の関心事なのです。

私たちは、自分自身だけが自分ではなく、ある意味で、「自分と家族」が自分になっています。ヨシュアの言葉を思い出してください、「私と私の家は主に仕える。(24:15)」と言いました。私は主に仕える、と言わないで、私と私の家は、と言ったのです。ですから、自分は主に従うけれども、自分の家族が主に従わないという時の葛藤は、とてつもないものです。それをイエス様は、「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」と言われたのです。そして、「憎まないなら」という言葉まで使われたのです。当たり前のように、自然に与えられていて、愛している存在よりも、強い結びつきをもって愛するのが、主イエスと弟子たちの関係です。

そのために、家族や自分の属する共同体、また日本人という共同体から外れて、主に従っていくということもあるのです。イエス様は、宣教の働きをされている時に、マリアを始め、家族の人たちが引き取りに来ようとしてしました。しかし、主は人々にみことばを教えておられました。それでこう言われます。「マタ 12:49 それから、イエスは弟子たちの方に手を伸ばして言われた。「見なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。」」主ご自身が、肉の家族の外に出て、霊の家族と共におられる決断をされています。弟子たちに、こう言われました。「マタ 19:29 また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子ども、畑を捨てた者はみな、その百倍を受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」たとえ、家を捨てても、百倍のものを受けて、永遠のいのちを受け継ぐのです。

イスラエルに聖地旅行に行った時に、来日経験のある、ユダヤ人信者の方と会いました。日本のキリスト者たちのことを聞かれていたようです。「似ているかもしれない」と仰っていました。ユダヤ人は、イエスを自分の主として信じて、従おうとするならば、ユダヤ人というものを捨てなければいけないと感じるのだそうです。その必要は全くないのですが、ユダヤ人というものと、ユダヤ教にある教え、しきたり、共同体が一体となっています。それらを捨てなければいけないのか、という思いになるのです。日本人も同じですね。

日本人でなくなる必要は全くありません。けれども、日本の文化や伝統、宗教などが、日本人というものを形成しています。イエスに従うとなると、それらを捨てなければいけないのか？となるのです。私たちは先祖供養をすることはできませんが、先祖を敬うことはできます。慰霊はできませんが、追悼はできます。墓は、イエスご自身が墓に葬られましたね、埋葬も何の問題もありません。

日本のキリスト教会は、そのために果敢に、創造的に新たな文化や習慣を作ろうとしています。教会のための墓。法事ならず、逝去者記念礼拝。初詣ならず、元旦礼拝。七五三ならず、献児式などです。先祖を敬うような行事を、キリストにあって作ってもよいかもしれません。皆さんご自身が、新たな開拓者となって、家族を愛して、隣人を愛する、新たな働きをすればよいのです。

しかし、そうならず、キリスト者であることの告白をせず、心に恐れを抱いて、周囲の人々と同調して生きる道を選んでいってしまう人々が、あまりにも多くいます。そうした圧迫や圧力に抗うための励ましの言葉が、ヘブル書です。そこでこの手紙の最後の励ましの言葉が、今読んだ箇所です。

1A 宿営の外で焼かれるからだ 11

11 節を再び、見てください。「動物の血は、罪のきよめのささげ物として、大祭司によって聖所の中に持って行かれますが、からだは宿営の外で焼かれるのです。」

著者は今、幕屋における、「罪のきよめのささげ物」のことを話しています。レビ記には、主の前に献げる、いくつかの、いけにえのついての教えがあります。祭壇の上で、牛や羊、やぎを、火によって焼くのですが、全てのからだを焼くのは全焼のいけにえといいます。そして、脂肪や内臓の一部のみを、祭壇の上で燃やし尽くして、残りの肉は一部は祭司が、さらに残ったものは民が食べるという、いけにえもあります。それが、交わりのいけにえと言います。その他、動物ではなく、穀物の供え物もあります。

1B 罪を清める血

そして、「罪のきよめのささげ物」もあります。レビ記 4 章にあります。とても長い引用になりますが、よろしければ、開いてみてください。4 章 2 節から 12 節までです。

2 「イスラエルの子らに告げよ。人が、【主】がしてはならないと命じたすべてのことから離れて、気づかずに罪に陥り、その一つでも行ってしまった、以下のような場合には——3 油注がれた祭司が罪に陥って、民が責めを覚える場合には、その祭司は自分が陥った罪のために、傷のない若い雄牛を罪のきよめのささげ物として【主】に献げる。

ここですね、罪のきよめのささげ物です。

4 彼はその雄牛を会見の天幕の入り口、【主】の前に連れて行き、雄牛の頭に手を置き、【主】の前でその雄牛を屠る。

手を置くのは、一体化するためです。罪を犯した者の罪が、雄牛に転嫁されます。雄牛が罪を負っているのです。それで、雄牛が罪の身代わりの死を経るのです。

5 その油注がれた祭司はその雄牛の血を取り、それを会見の天幕に持って入る。6 その祭司は指を血に浸し、【主】の前で、聖所の垂れ幕に向けてその血を七度振りまく。7 祭司はその血を、会見の天幕の中にある、【主】の前にある香り高い香の祭壇の四隅の角に塗り、その雄牛の血をすべて、会見の天幕の入り口にある全焼のささげ物の祭壇の土台に流す。

聖所の中まで、血を携えていき、そこで主の聖所を清めるのです。このことについては、私たちはすでに、キリストがご自身の血をたずさえて、天にあるまことの聖所を清められた、というところで学びました。

8 そして、罪のきよめのささげ物であるその雄牛の脂肪をすべて取り除く。すなわち、内臓をおおう脂肪と、内臓に付いている脂肪すべて、9 また、二つの腎臓と、それに付いている腰のあたりの脂肪、さらに腎臓とともに取り除いた、肝臓の上の小葉を取り除く。10 これは交わりのいけにえの牛から取り除く場合と同様である。祭司はそれらを全焼のささげ物の祭壇の上で焼いて煙にする。

脂肪と腎臓の部分は、交わりのいけにえと同じように、祭壇の上で焼きます。

11 その雄牛の皮とそのすべての肉、頭と足の部分、さらに内臓と汚物、12 すなわちその雄牛の残りすべてを、宿営の外のきよい所、すなわち灰捨て場に運び出し、薪の火で焼く。これは灰捨て場で焼かれる。

ここです。これが、罪の清め献げ物の特徴です。交わりのいけにえの時には、肉の部分は焼いて食べます。けれども、肉も、頭や足の部分も、内臓や汚物の部分も、すべてのからだを、宿営の外に運び出すのです。そして、定められた、清められた灰捨て場で焼きます。

2B 宿営から離れる罪

これが、血は聖所に携えるけれども、からだは宿営の外に持っていくということなのです。一体、これは何なのか？もちろん、罪を宿営から引き離すためです。その雄牛のからだは、罪を負っているのです、外に持っていく、引き離すのです。

2A 門の外の苦しみ 12

そこで著者は、このことが、主ご自身が十字架の上で死なれた時に起こったことであると教えているのです。「¹² **それでイエスも、ご自分の血によって民を聖なるものとするために、門の外で苦しみを受けられました。**」

1B ご自分の血による清め

私たちは、これまで主イエスがご自身の血によって、私たちの罪を取り除き、聖なるものとしてく

ださったことを学んできました。

2B 城壁の外での十字架刑

しかし、今、著者はここで、「**門の外で苦しみを受けられました。**」と言っています。門の外、というのは、エルサレムは、他の聖書時代の町と同じように、城になっていました。城壁に取り囲まれ、その出入りは門によって行っています。門というのは、聖書の中で極めて重要になっています。昔は、外敵によってすぐに自分たちの生活がなくなります。ですから、どんなに無慈悲なことでも、日没になる時には戸を閉めて、その後でやってきた人たちがいても、決して仲に入れません。だから、門から入るということは、彼らにとっては救いを意味するのです。黙示 21 章には、「**都の門は一日中、決して閉じられない。**」とあります(25 節)。そこには、外敵がおらず、救いが完全に保障されていることを意味しているのです。

それで、当時のエルサレムの町の状況をお話したいと思います。イエスが十字架に付けられた場所は現在、考えられるところが二つあります。一つは、聖墳墓教会というところです。ここは、ギリシア正教会を始め、伝統的な様々な教派が管理している、歴史的教会です。もう一つは、上の方、「**ゴルドンのカルバリ**」というのがあります。これはイスラエルの地が英国統治領になっていたとき、ゴルドンという英国将校が、その岩が、しゃれこうべに似ていたのを見て、その地を買い取ったものです。そこには、聖書の記述ときわめて見ている、園の墓があります。プロテスタント信者が多く訪れるところです。

園の墓は城壁の外にあります、聖墳墓教会は中にあります。しかし、当時の城壁と今の城壁は異なります。今は、城壁の中にありましたが、当時は存在し、そこから出てすぐのところにあるのです。ですから、どちらであっても、城壁の外にあるのです。イエスは城内で十字架刑の宣告を受けられた後、その形の執行のために、エルサレムの外の、ゴルゴダに連れて行かれたのです。したがって罪のいけにえが、イスラエルの宿営の外で、そのからだは焼かれたと同じように、主のからだは、エルサレムの門の外で引き裂かれました。私たちの罪の供え物となられた方は、その罪のゆえ、イスラエル人の住む町から出ていかなければならなかったのです。

3A 神の恵みへの応答 13

そこで、13 節です。「**ですから私たちは、イエスの辱めを身に負い、宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。**」

1B イエスの辱め

イエス様は、城壁の外へ連れて行かれる時に、辱めを受けられました。人々に、自分の十字架を背負って歩くのは、見せしめのためです。そしてイエス様は、ユダヤ人たちから見捨てられた形で、エルサレムの城壁の門から出ていかれたのです。「ヨハ 1:11 **この方はご自分のところに来ら**

れたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。」とあるとおりです。

私たちは、イエスを信じて、それでこの方がどれだけ素晴らしいのかを知ります。その救いの喜びは、他の人々に伝えずにはられません。けれども、どれだけ素晴らしいのかを話しても、人々がそのまま受け入れるわけではありません。「なんて、素晴らしいお話でしょうか！」と感動して、聞いてくれるわけではないのです。受け入れてくれません。無視します。時に罵ります。そして、仲間外れにされてしまうこともあるでしょう。それは、自分が悪いのではなく、私たちが、キリストを伝えているからです。この方を受け入れたくないという人々の心が、そうさせているからです。

2B 共同体の外

そして、「**宿営の外に出て**」とあります。ユダヤ人信者たちにとって、これが最も困難なことでした。このまま信仰を明らかにしていいたら、ユダヤ人の共同体にすることが居心地が悪くなると思っていました。けれども、それをしてしまうと、イエスへの信仰が保てなくなります。

ヨハネによる福音書には、イエスについては信じたいと思っても、恐れ退いている人々の姿が、何度となく出てきます。イエス様が仮庵の祭りでエルサレムで、みことばを教えている時に、「7:12-13 群衆はイエスについて、小声でいろいろと話をしていた。ある人たちは「良い人だ」と言い、別の人たちは「違う。群衆を惑わしているのだ」と言っていた。しかし、ユダヤ人たちを恐れたため、イエスについて公然と語る者はだれもいなかった。」イエス様については、良い人だと思っていたのです。しかし、ユダヤ人、すなわちユダヤ教の指導者の手前、公然と語れなかったのです。

そして、生まれつきの盲人が癒されたのですが、その日が安息日でした。それを問題にしたユダヤ人の指導者たちは、両親をサンヘドリンに連れてきました。両親は、イエスについての証言は避けたのです。「どうして今見えているか、分かりません。あれは、もう大人ですから、本人に聞いてください。」というように言いました。「9:22 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者がいれば、会堂から追放すると決めていた。」会堂から追放する、というのは、単にその建物から追放するということではありません。あなたは、ユダヤ人として生きることから追放します、ということです。仲間から外されるのです。これこそが、宿営の外に出ることなのです。

けれども、私たちは学びましたね、ヘブル 10 章で、ハバククに主が言われたことばが引用されています。「**「わたしの義人は信仰によって生きる。もし恐れ退くなら、わたしの心は彼を喜ばない。」**しかし私たちは、恐れ退いて滅びる者ではなく、信じていのちを保つ者です。(38-39 節)」

3B 神の近づき

私たちは、キリストの告白のゆえに、今まで属していたところから、除外されることがあります。け

れども、その報いは大きいのです。それは、「**みもとに行こうではありませんか。**」とあるように、神のみもとに行けるのです。そして、神のみもとに来る、他の兄弟姉妹が与えられるのです。自分の家からは引き離されたとしても、神の家が与えられるのです。

先ほどの、生まれつきの盲人がイエス様に癒していただいた後に、どうなったかを思い出しましょう。両親が証言するのを拒んだので、本人がサンヘドリンに呼ばれました。彼らは、イエスが罪人であると決めつけます。そして、どのようにして、お前の目を開けたのか、と問い詰めます。すると彼は、大胆にも挑発するのです。「9:27 すでに話しましたが、あなたがたは聞いてくれませんでした。なぜもう一度聞こうとするのですか。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか。」そして、彼は、はっきりと言います。「9:31-33 私たちは知っています。神は、罪人たちの言うことはお聞きになりませんが、神を敬い、神のみこころを行う者がいれば、その人の言うことはお聞きください。盲目で生まれた者の目を開けた人があるなどと、昔から聞いたことはありません。あの方が神から出ておられるのでなかったら、何もできなかったはずです。」はっきりと、イエスが神から出ておられると宣言したのです。

それで彼は、追い出されます。そう、もう彼はユダヤ人として生きることが困難になってしまいました。しかし、そこにイエス様が、待っておられたのです。「9:35-38 イエスは、ユダヤ人たちが彼を外に追い出したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」その人は答えた。「主よ、私が信じることができるように教えてください。その人はどなたですか。」イエスは彼に言われた。「あなたはその人を見えています。あなたと話しているのが、その人です。」彼は「主よ、信じます」と言って、イエスを礼拝した。」イエスを礼拝したのです。主にお会いすることができたのです。

皆さんも、大胆にキリストを告白してください。もし恐れて退いたら、いのちをなくしてしまいます。けれども、信じて告白したら、のけ者にされるかもしれませんが、イエスご自身を知ることができ、いのちを得ることができるのです。